

説教 『神の義と宗教改革』山本 護 牧師  
聖書 ハバクク書 2：4／ローマの信徒への手紙 1：16～17

先週は、讚美と祈りが状況を転換させる出来事に注目した。おぞましい獄に平安が訪れ(使徒16:25)、粗暴な看守が救いを求めた(16:30)。獄は獄のままであり、看守は看守のままでありながら、まるで違うものに変容したのだ。同じく、聖書の言葉は変わらないのに、受け取る意味が転換することもある。

宗教改革記念日は10月31日。M.ルターが95箇条の提題を公にしたのが1517年のこの日だった。宗教改革が引き起こされる地殻変動のエネルギーはすでに満ちていて、ルターの信仰的な葛藤がその引き金となった。大学の神学教師だったルター修道士は、自らが講じていたロマ書「福音には、神の義が啓示されている(マ1:17)」という言葉に苦しんでいた。教会の教えに沿ってこれを「義の神が罪人や不義な者を罰し給う」と解し、修道士として悔い改めながら生きながらも、自分の償いで神が満足されるとは思えなかった。誠実で無垢なルターは、「罪人を罰する義の神」を憎んでさえいた。

奇妙なことに、パウロの葛藤(7:13~24)とその後の希望(8:1~2)は明確なのに、これを教えているルターの胸にはストーンと落ちなかったようだ。ルターは、使徒パウロの言葉と激しく衝突し、日夜「福音には、神の義が啓示されている」という御言葉を黙考し続けた。やがてまことに単純な神の御心が啓かれる。「正しい者は信仰によって生きる(1:17b)」という御言葉を、「神の義という恵みを受け、人は信仰によって生きる」と解したのだ。聖書の言葉は何も変わらないが、ルターはこれを「審き」ではなく「恵み」として受け取った。転換で生じたこの希望には、苦しんで掴み取った重みがある。

転換、すなわち「悔い改め」は、事柄を吟味して反省することではない。人間が横取りした信仰を、神にお返しして、戴き直すことなのだ。転換は、私たちの心にある御言葉よって起こる。そのきっかけは、何気ない出来事や礼拝の説教であったとしても、転換させる御言葉はすでに私たちの内にある。キリスト者に必要なのは葛藤を抱え続けられる柔らかい強さ、「どうにかなる」という根拠なき明るさ。

信仰生活が長くても葛藤がなくなるわけではない。むしろ御言葉の新鮮さが、馴染んでいる救いの枠組みと摩擦を起こす。かえって葛藤が生じやすくなるわけだ。これは、ありがたいこと。既に用意している容器にすんなり納まってしまうような小さな信仰は、キリストのものではない。それは人間の真理に過ぎない。ルターを見よ、パウロを見よ(7:15)。葛藤や矛盾を歓迎しようではないか。神の義によって無条件で恵みを頂戴し、獄に拘束されている私を解き放つ信仰に生きようではないか。

ロマ書で引用された預言者の言葉(1:17b)、「見よ、高慢な者を。彼の心は正しくありえない。しかし神に従う人は信仰によって生きる(ハバクク2:4)」。元来人間は高慢で、機会を得るとそれが表出する。だが高慢な罪は恵みによって打ち砕かれ、「信仰によって生きる」ことになる。キリスト者は打ち砕かれる痛みを知っている。それと同時に、その痛みの奥にある不可思議な解放感も経験しているはずだ。「信仰によって生きる」とは、「生きる」ことの本意通り、神に「生かされる」ことなのである。



【おまけのひとこと】

紆余曲折 あちこちぶつかりながら ようやく辿り着く場がある 理解ではない 納得とも違う  
ぶつかった傷だけが知る恵み 傷も癒えればやがて忘れてしまうだろう 癒しの経験は深く残るが